

2023年11月24日

2023年10月 Nr. 511

さて、今回は歴史と伝統のあるドイツ・ボン市の「ラインホテル・ドレーゼン (Rheinhotel Dreesen)」が取り上げられています。

ライン河畔のボン市における諸ホテルの内の一つは、ラインホテル・ドレーゼン (Rheinhotel Dreesen) といいます。なぜならば、このホテルはドレーゼン家 (Familie Dreesen) が所有しているからです。現在のオーナーは、1893年にこのホテルを建て、1894年に開業した曾祖父と同じフリッツ (Fritz) さんという名前です。„Erlebte Geschichten“ (「体験した物語」) というシリーズ番組において、番組の取材作家であるヘルツォークさん (Herr Herzog) は、このホテルの創設者の曾孫である、そのフリッツさんと話しますが、ヘルツォークさんが語るものについては、リスナーは聞くことができません。ヘルツォークさん自身が語る部分はすべて、編集により彼が録音からカットしたからです。

しかしながら、ドレーゼンさんはある場面で、ヘルツォークさんとドレーゼンが座って話している部屋は、ヒトラーが定宿として借りていた2階の3つの部屋のうちの一つであると言及しています。その部屋には大きなバルコニーもありました。30年代にはその費用は毎年1年を通じて、ベルリンのドイツ帝国宰相官房から支払われました。

ドレーゼンさん (Herr Dreesen) の曾祖父は、多く存在するようなホテルは建てるつもりはありませんでした。それは小さな宿泊所であってはならず、非常に特別な設備を備えた豪壮なホテルであるべきだと考えました。他のホテルでは宿泊客が体を洗う水は、毎日部屋に運び込まれていました。しかしながら、ここではすべての部屋で水道設備があり、宿泊客は好きなだけ水を使うことができました。その上、ガス灯照明ではなく、全部屋用に電気がありました。その電気は当時そのホテルで自家発電していました。この豪華な設備は、多くの富裕層の人々がここで宿泊したいと願うようになりました。

リュングスドルフ (Rüngsdorf) はライン河畔でボンの南東に位置しており、1899年以來ゴードスベルク (Godesberg) の一部です。ゴードスベルクは当時、順調に発展し、多くの富裕層の人々が高齢になるとそこに住みたいと願うようになり、この街を自分用に高齢者用居住地として選ぶようになりました。

ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世には6人の息子がおりましたが、その内の一人であるドイツ

皇帝皇太子はボン大学で学び、ライン河に沿って馬を走らせることが好きでした。彼はボンから上流へ向かって南東方向へ馬を走らせると、いつもこのホテルのそばを通り過ぎたのですが、このホテルが開業する前にも、皇太子はそこに来たことがあったということです。なぜならば、庭園がすでにそこにあったからです。そして、そこで彼は軍楽隊のコンサートで指揮したといわれています。

ドレーゼンさんがこのホテルを父親から引き継いだとき、彼はまだそれには若すぎました。1972年2月11日に父親が亡くなったとき、彼は1949年11月17日の生まれ、つまりまだ22歳でした。これは本当に突然のことでした。翌日、ドレーゼンさんはホテルにやって来ました。2月12日と13日はカーニバルの週末で、14日は「ばらの月曜日」、15日はファスナハトでした。復活際の前の40日にわたる断食期間が灰の水曜日に始まる前に、これらの日にはホテルではやるべきことが非常に多くありました。

その土曜日、つまりドレーゼンさんのホテルでの最初の就業日には大広間においてカーニバルの舞踏会が行われました。その前の日に亡くなった彼の父親を悼む代わりに、皇太子夫妻を歓迎し、「万歳！（Alaaf!）」と叫ばなければなりませんでした。父親の仕事仲間たちは今やドレーゼンさんの仕事仲間になりました。彼らはドレーゼンさんを大いに助けてくれました。彼の父親がもう病気だったときからのこの間、彼らはホテルのために要求以上のことをしてくれていました。

ライン河は川ではなく、大河です。ホテルからライン河を見ることは、宿泊客にとって当然、非常にすばらしいものです。ライン河は幅が広いので、向こう岸までちょっと見晴らしがきくからです。しかしながら、ドレーゼンさんがライン河を眺めるときは、しばしば不安になります。多くの宿泊客はライン河の眺望のためにやって来ますし、ホテルもまたこれによって生きています。しかしながら、時折ホテルはライン河の水のために閉鎖しなければなりません。ライン河の水がホテルの地下室に入ってくることは、殆ど毎年ちょっと起きます。さらに水位が上がり、車寄せ〔ホテルの入り口〕まで入ってくることもあり得ます・・・。

そうした場合、ホテルの滞在客が足を濡らさずにホテルの出入りができるように、彼の従業員たちが歩行者用の渡り板を設置します。そしてさらに水位が上昇すると、いつかあるときにはホテル内に留まります。するとホテルは閉鎖されます。そのようなひどい洪水は90年代には13ヶ月の間に2度経験しました。それは、1993年のクリスマスの時と1995年の1月末でしたが、その時は1階での水位がテーブルの高さまで達しました・・・。

さて、今回話題になっているラインホテル・ドレーゼンですが、そのホームページを閲覧

しますと、次のようなホテル側の挨拶が掲載されています。

「ライン川沿いのホワイトハウスは、新しい、充実した年を迎え、スタッフ一同、皆様をお迎えできることを楽しみにしております。長年にわたり、私たちに寄せてくださったご愛顧とご忠誠に心から感謝いたします。皆様のおかげで、最高の立地にあるこの家族経営の伝統的なホテルの長く成功した歴史を続けることができます」

この挨拶文には顔写真が添えられていますが、この写真の主はオーナーのドレーゼンさんではなく、支配人のケラーさん (Herr Keller) のようです。これは私には意外に思われましたが、オーナーは前面には登場しないものなのかもしれません。Wikipedia によりますと、現在のオーナーは 5 代目とのことです。今回登場する 4 代目オーナーのドレーゼンさんの息子さんのようです。このホテルは歴史上の著名人が数多く宿泊したことのあつた伝統あるホテルですが、私は今まで全くその名前さえ聞いたことがありませんでした。

また、このホテルのことをみずから「ライン川沿いのホワイトハウス」と表現しているのがおもしろいと思いました。常連客にも「ライン川沿いのホワイトハウス」と認識されているのでしょうか。確かに外壁が白く、米国のホワイトハウスに似て無くもないのですが、建物の形状は大分違うという印象がありますが・・・。

更に、ホームページにはかつて洪水の被害を受けたときの写真も数枚掲載されており、課題・放送で言及されている洪水による被害の様子が生々しく伝わってきます。

ところで、父親が亡くなったとき、22 歳のドレーゼンさんはどういう立場・状態だったのでしょうか。ホテルで既に修行をしていたのでしょうか。それとも全く畑違いの職業に就いていたのでしょうか。あるいはまだ学生だったのでしょうか。もっとも、父親の死後、すぐにホテル経営を継承したわけですから、学生だったことはちょっと考えにくいとは思いますが・・・。いずれにしても、わずか 22 歳で大きなホテルを継承しなければならないのは、他の経営幹部や従業員の協力があつたとは言え、大変な重圧を感じていたと思われるし、苦勞もいただろうと思われまふ。

その上、ドレーゼンさんは、父親の死に際して、悼むこともできないばかりか、ドイツ皇太子を歓迎するために皆と一緒に「万歳！(Alaaaf!)」と叫ばなければならなかつたのは、さぞ辛い経験だつただろうと思ひます。

ところで、当時他のホテルにおいては、体を洗う水を部屋に運んでいたという話がでてきますが、ラインホテル・ドレーゼンにおいては水道設備が備わつていたためその必要がな

かったとのことでした。現在のホテルでは当たり前のことが当時はそのような苦勞があったことが印象的でしたし、水道設備が整っていることがいかに重要なことであるかを再認識しました。翻って昔の日本の旅館の場合、各客室には風呂場がなくとも、共同の風呂場があったはずですので、各部屋まで運ぶ必要がなかったと思われます。これは大きな違いと言えそうです。

今回、ボンのカーニバルの話が登場しますが、私がかつて勤務していたデュッセルドルフにおいても賑やかなパレードが毎年繰り広げられていました。ある年には会社がパレード見学用に借りてくれた某ホテルの部屋から、会社の同僚と飲食しながらこのパレードを間近に見学したことを懐かしく思い出します。多くの人の派手な仮装や政治色の強いスローガンに掲げた山車のパレードが印象に残りました。それは現在から約 30 年以上前、1980 年代末のことでしたが、現在も同じような風景が繰り広げられているのでしょうか。

K.K.

2023年12月29日

2023年11月 Nr. 512

さて、今回は「自分自身の父親の死」が取り上げられています。

11月は、ドイツでは死者を追悼する月です。11月1日はカトリック教徒にとってすべての聖人の日であり、翌日彼らはすべての霊を悼みます。その後の日曜日は国民哀悼の日であり、その次の水曜日はプロテスタントの懺悔と祈りの日であり、1つ前の週の第1アドベントの日曜日の1週間前には、死者慰霊日が続きます。これにふさわしいものとして、ヴェールマンさん (Frau Wehrmann) の2023年1月23日の放送があります。彼女は自分自身の父親の死について、また母親、2人の兄弟、そして自分がどのようにそれに向き合ったかについて語っています。

父親は2020年1月末に79歳で亡くなりました。それは、両親の55回目の結婚記念日から1週間とちょっと経った日でした。彼はすでに脳卒中を起こしていたため、結婚記念日を病院の集中治療室で過ごさなければなりませんでした。彼は24歳の若さで結婚していました。

放送の間、リスナーは父親の声を何度も聞きます。それはヴェールマンさんの電話機に録音されていました。父親が毎水曜日に彼女にいつも通り電話をかけようとしていたときのものです。しかしながら、彼女は電話に出ることができませんでした。彼女は父親の電話を毎回聞いていましたが（その後削除していました）、最近聞いた後に録音テープからもう削除していませんでした。彼女は父親がもう長くは生きられないかもしれないという予感があり、彼女の留守番電話機で父親の声をもう一度聞くことができることは、うれしいと思ったからかもしれません。

ヴェールマンさんの両親が出会った時、父親が20歳、母親は当時14歳でした。母親が18歳になるとすぐ結婚し、その後両親は55年間結婚生活を送りました。父親の死は母親にとって深い衝撃でした。父親が木曜日に亡くなったとき、母親だけが父親のそばにいました。前日、家族はすべて彼の病室にいましたが、次の日には子供たちは交代で病院に来ることに決めていました。ヴェールマンさんがすでに病院に向かっていたとき、母親が彼女の携帯電話に電話して、父親の死を知らせてくれました。

ヴェールマンさんが、何をその瞬間に感じたのかは、わかりません、考えたのは、もし彼女が時間通りに出発していたら、父親が亡くなったときに彼女がそこにいたかもしれないということでした。彼女の母親は、彼女が彼の最後の息を聞いたことを喜んでいました。彼女は冷静でしたし、彼と一緒にいることを喜んでいました。ひょっとして彼がそれを望んでいたかもしれないと思います。

ヴェールマンさんは、前日に父親の部屋に入り、そこでベッドで意識不明のまま横たわっているのを見て驚いてしまい、父親が息をひきとるときに果たして自分がそばにいたいかどうか考え始めました。彼女の兄弟のペーターさんは、この瞬間を共に体験したくなかったといいます。その時何を言えればいいのかわからなかったからとのことでした。

ヴェールマンさんは、この番組のために、彼女のもう一人の兄弟アヒムと彼女の父親について話し、その会話をテープに録音することもしました。彼は、父親が自分自身に確信を持ち、非常に自信に満ちていたと言っています。父親は話し好きで、公の場に出ることも好きでした。父は常に頼りがいのある人でしたが、父以外の誰かが父と異なる意見を持っていた場合、ほとんどそうではなかったにもかかわらず、父親はそれを自分に対する批判として受け止めてしまうようなところがありました。

父親のマイヤーベルクさん (Herr Meierberg) は、体操協会の会長であり、ボートクラブの会計係を務めていましたし、男性合唱団のメンバーでもありました。その上若いときから政治にも関与していたとのことでした。しかし、彼が年金生活に入ったとき、突然すべての名誉職を辞任し、「もう地域社会のために十分に貢献した」と言いました。彼がすべてを急にやめたことは、当時の誰もが間違っていると感じていましたが、彼の妻、娘、2人の息子たちの誰もが、彼にそれを口に出しては言いませんでした。彼の健康状態はその後、もはや快方には向かいませんでした。彼は糖尿病、極度の高血圧、不整脈を患っていました。

しかしながら、ヴェールマンさんとペーターさんにとって、父親が亡くなるだろうということは、最終的には1日か2日前になって初めて明確になりました。父親は、自分が死ぬ運命にあることを考えようとはしませんでした。父親の妻、つまり母親の強い要請があったことにより両親は遺言書を作成しました。しかしながら、患者事前指示書については、父親は作成しませんでした・・・。

さて、今回は放送記者であるヴェールマンさんが自分自身の病気だった父親の死取材して、放送していますが、これは異例なことだと感じます。しかも、録音をしながらの取材であり、その取材対象は父親だけでなく、一家の他のメンバーである母親、二人の兄弟に

も及びます。結果的に、一家全体のプライバシーを世間に晒すこととなりますので、私の感覚ではまず考えられません。何が彼女にそうさせたのでしょうか。私が Beiheft を読んで、放送を聞いたりした限りでは彼女の動機については、よく理解できませんでした。

さて、その彼女の父親ですが、彼は年金生活に入った途端、何がそうさせたのか、父親の考え・行動が 180 度変わり、それまで活動的に務めていた名誉職をすべて辞めてしまいました。辞めた理由は「それまで地域社会のために十分尽くしてきたから」ということでした。辞めたことが彼の健康にも悪影響を及ぼしたのではないかとさえ思ってしまう。名誉職としてさまざまな団体に関わっていることが、生き甲斐となっていたかもしれせんし、そうとは言えないとしても、家の外で活動することが良い生活のリズムを形成していたのではないかと想像します。ところが、すべての名誉職を辞することにより、外に出て活動をしなくなり、自宅内に籠もりがちになり、気持ちの上でも内向きになり、結果的に健康にも悪影響をおよぼしたと考えられないでしょうか。Beiheft によれば、年金生活に入って以来、糖尿病、極度の高血圧、不整脈を患うようになったようです。

しかしながら、すべての名誉職を辞めたことに対し、家族の皆が彼の「間違っただけ」だと思っていたということは、名誉職を辞めた時点では、それらの病気の兆候はあったとしても病状はまだそれほど深刻ではなかったのではないかと推測しますので、本来であれば一部の名誉職でも継続して務めるべきだったと思います。そうすれば、寿命まで延びたかどうかわかりませんが、少なくともいわゆる「健康寿命」(Wikipedia によればドイツ語では die Gesundheitserwartung と表現するようです) は延びたのではないかと思います。その意味では名誉職をすべて辞めるという父親の決断だけでなく、その決断に対して家族の誰もが心の中では思いながらも明示的には反対をしなかったことが惜しまれます。

これに関して思い浮かんだのが、最近時折日本では言われることなのですが、高齢者に必要なのは「キョウイク (教育?)」と「キョウヨウ (教養?)」という言葉です。それぞれ、「教育」と「教養」でなく、実際は「キョウイク」とは「今日も行くところがある」こと、「キョウヨウ」とは「今日も用事がある」ことだそうです。「今日も行くところがある」というのは「居場所がある」ことで、「今日も用事がある」とは「出番がある」ことだと言い換えることができます。いずれもどこかで何かしらの活動をしていることを示唆しています。高齢者になっている我が身を振り返ってみますと、なるほどと納得する言葉です。

さて、その父親と対照的なのが母親です。Beiheft によれば、母親は夫を亡くした悲しみを隠しませんが、同時に新しいことに興味を持ち、人生がまだ彼女に何をもちたしてくるか好奇心を抱いているとのこと。体操や編み物をするために出かけ、友達と会い、招待を楽しみにし、小旅行も楽しんでおり、新しい活動や人との出会いを求めて前向きに

行動している様子が私には印象に残りました。そして、それはまた今回の放送の中ではちょっと救いになっていると思いました。

ところで、今回は上記の通り「自分自身の父親の死」が取り上げられましたが、昨年 2022 年 12 月においても「孤独死」という「死」が話題になっていました。また 2020 年 12 月においては「家族を失った人に対しかけるべき言葉」がテーマになっていましたが、これも広い意味では「死」に関する話題といえます。また、更に遡りますと、2019 年 12 月においても、「母の死」がテーマでした。従いまして、ドイツにおいては 11 月が死者を追悼するイベントが多く、死を連想させる月であると思われるので、12 月の課題には広い意味で死に関連した話題がしばしば取り上げられているのだろうと感じました。

「ゲルマニア第 26 号」において「シュタインベルグ教授の思い出 1939 年～1945 年」を拝読しました。1939 年 9 月 1 日にナチ党率いるドイツ軍がダンツィヒに侵攻したことで、第二次世界大戦が勃発したことは、私は教科書でしか知りませんでした。この回想を読みますと、石山先生ご自身がまさに少年時代にこれを直接体験されていたことを知り、改めて驚きました。また、先生がダンツィヒを離れる際に、お父様とは生き別れになり、長いこと消息不明でしたが、終戦から数年後、お父様はダンツィヒでの戦闘で戦死されたらしいと知らされたとのことでした。やはり戦争は残酷なものだと思います。更に、先生の回想録を読んで、私は Nr. 446 (2018 年 4 月) において登場したブットグライト一家のことを思い出しました。彼らもまた、第二次世界大戦末期にソ連軍侵攻に伴い東プロシアから避難した人々でした。この放送番組は先生ご自身の少年時代の体験と重なるところが多々あると思いました。

さて、今年も良いこと、悪いこと様々な出来事がありました。残すところ、あと一週間余りとなりました。石山先生には今年も大変お世話になり、ありがとうございました。どうぞ良いお年をお迎えください。

K.K

2024年1月29日

2024年1月 Nr. 513

さて、今月は「費用のかかるドイツの結婚式事情」が取り上げられています。

ドイツでは結婚式は戸籍役場で行われます。そのためには予約が必要です。多くの人が結婚したいと思う5月から8月の期間は、特に人気のある曜日については戸籍役場の予約リストがすぐに埋まってしまいます。そのため、予約を取るためには、早めに所轄の戸籍役場に申し込む必要があります。戸籍役場での結婚式は公式なものであり、希望する場合はその後、教会での式を挙げることもできます。また、多くの人にとって、大きな結婚式パーティーも欠かせません。それには、多くの親戚、友人、知人が招待されます。多くのカップルは、このパーティーに多額のお金を支出します。このため、春のウェディングシーズンが始まる前に、とりわけ年の始めにはほとんど毎週ドイツ各地で開催されるウェディングフェアにおいて宣伝されます。

トレーダーさん (Frau Treder) は、3月26日の放送で、140人のゲストを招待して6月に村のコミュニティセンターで結婚式を挙げるつもりであると言いました。彼らはすでに300ユーロで会場を予約していました。結婚式の食事はそこに運ばれる予定です。メインディッシュとデザートについては、2,500ユーロかかる予定です。飲み物は地元のドリンク配達業者が1,500ユーロで提供してくれることになっています。彼らは前菜を省略することにしましたが、それはお金を節約するためというわけではなく、肉料理の前にスープやそのようなものなどを食べる必要がないという考えからです。

加えて、彼らは、会場を美しく飾ったり、サービスを自分たちで提供したりするなど、多くのことを自分たちの手で行うことを望んでいました。彼らはシンプルにしたかったため、結婚式に8,500ユーロの予算を見込みました。彼女は500ユーロで古いコレクションからウェディングドレスを選び、会場の様々な装飾品については、彼らは中古品を自分たちでインターネットで注文したいと思っていました。

ミッテンツヴァイさん (Frau Mittenzwei) は2023年春に結婚したいと思っていました。彼女たちは、戸籍役場での結婚式の後、教会ではなく城または宮殿で祝賀式(結婚式のパーティー)を行い、牧師ではなく祝賀式の司会者と一緒に行いたいと思いました。彼女が最も祝賀式を挙げたいと思っていたラーティンゲン (Ratingen) の水城は、彼女たちが招待したい150人のゲストには小さすぎました。その後、彼らはシュロス・ベンスベル

ク (das Schloss Bensberg) を思い出しました。しかし、そこは高すぎました。すべてを含めると、そこで結婚式を行っていたら、おそらく 40,000 ユーロかかったでしょう。

ミッテンツヴァイさんは妊娠したため、プリンセスのように結婚することを諦めなければなりません。彼女はすでに彼女のウェディングドレスを買っていました。彼らは、宮殿ではなく、夫が料理責任者を務めるオーバーハウゼン (Oberhausen) の貯蓄銀行の従業員食堂で 2022 年 12 月に結婚式を挙げました。

彼女たちは、城でも宮殿でも結婚式を挙げるができなかったため、彼女は特別なものとして結婚式への馬車での移動を希望しました。それは彼女にとって、妥協点でした。その近くには乗馬クラブの厩舎があり、彼女が問い合わせたところ、当日用に白い馬車を借り受けるという承諾をすぐ得られました。それは、天気が良いときには太陽を楽しむことができ、悪天候の場合には雨から守ることができる、幌付きの馬車でした。その馬車を牽引したのは 2 頭のフリージアン・ホースでした。彼女にとって、それが貯蓄銀行への乗車で終わったとしても、あたかもプリンセスであるかのようにでした。

この結婚式はひよっとすると 15,000 ユーロかかったかもしれません。彼女のウェディングドレスは 2,000 ユーロでしたし、彼のスーツと二人の結婚指輪には 3,000 ユーロ支払いました。テーブルで供されるウェディング・フードの代わりに、彼らは牛フィレ、豚フィレ、サーモンフィレのビュッフェを注文しました。飲み物を含めると、1 人あたり 90~100 ユーロかかりました。白い馬車での移動には 650 ユーロを支払いました。それは必要ではなかったかもしれませんが、彼らは自分たちにこれ位の贅沢をしたかったのです。彼らが実際に結婚式にいくら費やしたかは、インタビューを受けたときにはまだ算出していませんでした。ひよっとすると 15,000 ユーロではなく、20,000 ユーロになったかもしれません・・・。

さて、今回は費用のかかるドイツの結婚式事情が話題になっており、課題では 2 人の事例が紹介されています。会場の飾り付けや料理・飲み物の手配を自分たちで行ったトレーダーさんの場合、8,500 ユーロでしたので約 136 万円 (1 ユーロを 160 円として計算) かかりました。また、ミッテンツヴァイさんの場合、最終的計算をしていないとのことですが、20,000 ユーロに近い金額でしたので、約 320 万円 (1 ユーロを 160 円として計算) でした。二つの事例には余りにも大きな差がありますので、ドイツにおいてはどちらがより一般的なものなのかわかりませんが、Beiheft に記載されているように、結婚式メッセに訪れた人たちから得たアンケート結果に基づきますと、16,000 ユーロですので、256 万円 (1 ユーロを 160 円として計算) となります。従いまして、ミッテンツヴァイさんの費用に近いとは言えます。会場の飾り付けや料理・飲み物の手配を自分たちで行ったトレーダーさんの場合が一般的ではないような気がしますので、どちらかと言えば、ミッテンツヴァイ

さんの場合がより一般的ではないかと想像します。

翻って日本の場合ですが、日本のある結婚情報誌の調査（2021年）によりますと、結婚式（結婚式後のパーティを含む）の費用は292万円とのこと。また、新型コロナウイルス感染症の影響前の2019年では355万円とのこと。

ところで、結婚式の費用もさることながら、今回私は結婚式への招待客の数に興味を持ちました。今回紹介されているトレーダーさんが140人ですし、ミッテンツヴァイさんも150人ですので、いずれも100人を大幅に超えた招待客数です。ドイツではこれが一般的なのかどうかわかりませんが、仮に日本における結婚式の招待客数と比較した場合、彼女たちの場合は非常に多いという印象を持ちました。例えば、上記の結婚情報誌の調査によりますと、招待するゲスト数は平均43人（2021年）とのこと。コロナ禍以前の2020年調査と比べ24人減少しているとのこと。つまり、コロナ禍以前でも65人だったということになります。私自身だけでなく、私の身近な人たちの結婚式、私自身が招待された知人・友人の結婚式などを思い返しても、かなり大雑把ですが、常に50人を上回る人数だったものの、100人以下のゲスト数だったと思います。日本では100人を超えるような招待客の結婚式は、一般人の場合、余り多くはないのではないかと思います。

また、招待人数別の割合についても、上記と同じ情報源には以下の通り記載されています（小数点以下は四捨五入）。これによりますと、回答者の79%が70人未満のゲストを招待しているということになります。

10人未満	9%	10～20人未満	14%
20～30人未満	11%	30～40人未満	11%
40～50人未満	11%	50～60人未満	11%
60～70人未満	12%	合計	79%

また、上記二人の女性の結婚式の会場にも興味を持ちました。トレーダーさんの場合、村のコミュニティセンターですし、ミッテンツヴァイさんの場合、城や宮殿を断念した後での貯蓄銀行の社員食堂でした。私には彼女たちの選択した会場がドイツでは一般的ではあるとは思えませんが、この放送を聞いていたドイツのリスナーはどのような反応をしたのか興味があるところです。会場の選択はともかく、彼女たちが自分たちの手で工夫を凝らした結婚式にしていたことに対してはポジティブに受けとめられていたのではないのでしょうか。私自身もそのように思いました。日本では結婚式（含結婚披露宴）は結婚式場またはホテルで行うことが多いと思いますが、そのような結婚式はドイツでは余り一般的ではないのでしょうか。

また、Beiheft (12 ページ) において結婚式を控えたジニングさん (Frau Jinning) という女性が登場します。私が意外に思ったのは、彼女がウェディングドレスを選ぶために母親、妹、二人の姪、親友など何人かの人を連れてきたことです。放送に登場するある結婚コンサルタントによれば、ドイツでは近年、このような傾向がますます増えているとのことでした。日本であれば、おそらく夫になる人または母親およびまたは姉妹くらいなど極く限られた人が同行すると思います。姪や親友が同行することは日本ではあまりないのではないかと思います。この点でもドイツと日本の違いを感じました。

K. K.

2024年3月1日

2023年1月 Nr. 514

さて、今月は「ヨーロッパの中世」が取り上げられています。

ヨーロッパにおいて今日、中世と言う場合、紀元500年と1500年の間の時期を指します。ルネッサンスにおいて既に14世紀から、その前の時代を中世と呼び始めました。というのは、古代とルネッサンスから始まる近代との間の過渡期とを感じるからです。フランス語の動詞 *renaître* は、*re* という接頭辞（ドイツ語では *wieder* 「再び」を意味します）と動詞 *naître*（ドイツ語では *geboren werden* 「生まれる」を意味します）から成っています。

ルネッサンス時代とは異なり、今日多くのドイツ人は中世に魅了されています。彼らは、この時代について情報を入手するために書籍を買ったり、この時代を扱った映画を見たり、騎士の試合に参加したり、中世の市場に足を運んで当時のドイツの生活を体験したりしています。

これらの中世の市場では、当時何を食べていたかを試食できるブースがあります。職人たちは、当時の仕事のやり方を披露し、鷹匠は鷹と一緒に狩りに出かける方法を示します。多くの人々が中世の生活を体験するために、一日または週末だけでも当時の扮装をします。子供たちは弓矢と盾を持ち、多くの女性は長いスカートを着用し、髪に花の冠をつけています。こうした活動は多くの人々に楽しみをもたらし、明るい雰囲気が漂っています。

中世が暗黒の時代であり、教会が全能で不安・恐怖を広め、女性は何も言えず、多くの女性が魔女として焼かれたという考え・イメージは、今でも尚存在しています。これは部分的には正しいです。しかしながら、女性が魔女として迫害され、火刑に処せられたのは、主に16世紀と17世紀、つまり、中世ではなく、近代初期と呼ばれる時代に起きました。

中世の女性たちは、単に母親や主婦、または修道女であるだけでなく、戦争にも参加したり、スパイ活動を行ったり、盗みを働いたりし、商業的な成功を収めることもありました。多くの人々が中世においては清潔さにあまり重きを置かなかつたと考えていましたが、今では実際には大抵の人が定期的に入浴していたことが判明しています。修道院の修道士たちは、修道院で身体の清潔さにも気を配っていました。つまりそれは単なる清潔さだけでなく、食事の際にも手を洗うことを意味していました。

中世の歴史を専門とするある女性教授は、現在の多くの人々が想像しているほど、当時の

人が実際に多く働いていたかどうかをちょっと調査したことがありました。彼女は、私たちが持っているイメージが誤っていると考えており、中世においては週 5 日間の労働が普通であり、これが宗教改革時代の間になってようやく廃止されたと解析しました。宗教改革時代になって初めて、人々はより働き始めたといえます。

13 世紀初頭に最初の大学が複数誕生しました。それまでには職業教育の場所や学問の高等学校が存在していましたが、新たに設立された大学は独自の法的地位を有し、教員と学生の共同体として特別な憲法を持っていました。これらはそこから発展した非常に複雑な機関でした。

10 世紀は長い間、暗黒の世紀だと見なされてきました。しかしながら、中世の歴史を専門とするある教授は、現在ではこれが客観的な説明ではないことを確かめ、単にこの時代については特に知識が少ないことを意味しているに過ぎないと指摘しています。この時代についてはほとんど記録が残されていません。この時代の歴史を再構築するためには、情報源が余りに少な過ぎました。

いずれにしてもこれはヨーロッパにあてはまります。何か時代にあてはまらないで、古風で時代遅れに人に感じられる場合、今日も尚時々、「それは全く暗黒の中世だ」というようなことをいいます。しかしながら、恐らく当時はそれほどひどいものではなかったでしょう。既に 1521 年に、一人の裕福な商人がアウクスブルクに困窮者のための住宅団地を建設させました。これは世界中で最も古い現存する社会住宅の一つです。困窮した人々はそこで年間の家賃としてわずか 88 セントしか支払いませんが、毎日、この住宅団地の創設者らのために祈りを 3 回捧げなければなりません・・・。

さて、今回の放送・課題において「ヨーロッパの中世」に関して大変意外で驚いた点が多々ありますが、特に私の印象に残ったのは以下の三つです。一つは、ドイツでは現在、中世ブームが起きているとのことです。また、もう一つは中世に対するイメージが覆されるような研究が発表されていること、そして最後は中世の「週五日労働制」です。

最初の中世ブームですが、中世の市場がドイツの至る所で頻繁に開設され、多くの人の中世の疑似体験をするためにやってくるといいます。私がドイツの子会社で勤務していた 1986 年～1991 年の間にはそのような話は聞いたことがありませんでしたが、私が気づかなかっただけかもしれませんし、その後起きた現象なのかもしれません。いずれにしても、現在そのようなブームが起きていることに対してとても興味が沸きました。何がきっかけになってそのようなブームが起きているのでしょうか。また、中世に対するイメージですが、私自身も「中世＝暗黒の時代」と思い込んでいましたので、今回の放送・課題で紹介

された諸事実は、女性の担っていた役割も含め非常に新鮮に映りました。さらに、当時は「週五日労働制」が一般的であったものの、宗教改革によりこれが廃止されて人々がより働くようになったとのこと。プロテスタントの思想が職業労働を積極的に行う精神を育んだことを考え合わせると、辻褄が合うと思いましたが、納得がいきませんでした。今回の課題・放送を通じて私の乏しいヨーロッパの中世に関する知識も多くの点でアップデートされたような気がします。

ところで、今回登場する「フッゲライ (Fuggerei)」ですが、半世紀近く前の学生時代にドイツ各地を旅行していた際に一度訪れたことがありました。その数年前、高校生時代の世界史の授業において、このフッガー家がイタリアのメディチ家と共に 15 世紀に富を背景に力を持ってきたことを学んではいましたが、フッガー家に対して特に強い関心や何らかの目的意識があつてのことではなく、アウクスブルクを訪れる際には見学すべきところとして当時の旅行案内書で紹介されていたからでした。当時はともかく旅行案内書を手がかりにその場所に何とかたどり着き、現場では辞書を片手に「フッゲライ」についてドイツ語の説明書きを読んだことを思い出しました。「フッゲライ」については、その後アウクスブルクが話題になった時にちょっと思い出す程度でしたが、今回、改めていくつものことを知ることができました。例えば、入居できるのはカトリック教徒に限定されていることや「フッゲライ」が貧しい人のための社会的住宅であるとしても、年間の家賃が 88 セントと無償同然で入居できることなどです。さらには、現在も尚「フッゲライ」は機能しており、現在 150 人ほどが住んでいるようです。また、放送や課題では「居住者は 1 日に 3 回祈り捧げる」とありましたが、どのように祈るかまではよく理解できませんでした。その後 Wikipedia のドイツ語版をチェックしたところ、創設者とその家族に感謝と敬意を表すために、主の祈り、信仰告白、アヴェ・マリアを日常的に唱えているということが分かり、納得できました。それにしても 16 世紀に創設された困窮者のための住宅が現在も尚、存続していることには驚かされます。

K. K.

2024年3月28日

2024年2月 Nr. 515

今月は「犯罪加害者と犯罪被害者が一緒に語り合い、和解すること」について取り上げられています。

犯罪については、誰がその罪を犯したかを立証することがとりわけ重要です。犯人は逮捕され、裁判にかけられます。裁判で彼に対して訴訟が行われ、通常は禁固数年の刑が宣告されます。そうすると彼はこの禁固刑に服さなければなりません。これは国に多額の費用をかけます。暴力の被害者は医療的にケアされますが、それ以外にはあまり手当がなされません。裁判では彼らは証人として聞かれ、犯人とそこで再び対面します。しかしながら、犯人がその後、つまり裁判の後にどうなったかは、大抵彼らは知らされません。

特に重大な暴力案件において犯罪者は終身、刑務所に入れられます。しかしながら、被害者もまたしばしば加害者の行為の結果に生涯苦しまなければなりません。従って、「私もまた終身刑を受けています（受けているようなものです）」という被害者もいます。加害者の暴力行為に苦しむ大抵の被害者は、その加害者にもう一度会いたいとは思いませんが、その加害者がどのような人物なのかをちょっと知ることにより、多くの被害者が自分の苦しみに耐えるのに役立ちます。

従って、ビーレフェルト (Bielefeld) の刑務所では、被害者と加害者を引き合わせる試みが始まりました。リリーさん (Herr Rilli)、刑務所内の社会福祉担当者で、この取り組みを担当しています。彼が担当している第1号館には、各階に60人の受刑者が収容されています。長い廊下に沿って、ただドアが並んでおり、それぞれのドアの後ろには収容室があります。通常、これらの部屋は刑務所の独房と呼ばれています。リリーさんは、被害者と加害者がお互いに話す機会を持ったり、お互いを少し知り合ったり、その時起きた出来事が相手にとってどのような意味を持つかを意識的に体験したりする機会を持てるようにしたかったのです。

彼の上司である刑務所の所長は、とりわけ受刑者のことを考えています。彼の目標は、加害者が自分の行為について深く考え、倫理的責任を自覚し、被害者に対する共感を持つことです。刑務所の所長として、彼は加害者に焦点を当てる必要がありますが、この「犯罪者・被害者サークル」(Täter-Opfer-Kreis) において被害者についても問題にすること

は非常に良いと考えています。

被害者の一人は男性 E さん (Herr E) です。彼は 57 歳で、職業はトラック運転手ですが、長年にわたり建設現場でも働いていました。加害者は彼をただ殴るだけでなく、頭に飛び蹴りを試みました。もしそれが成功していたら、彼は今頃亡くなっていたでしょう。しかしながら、その後、3 台のパトカーを伴って警察が駆けつけました。警察官たちは若くて屈強な男性でしたが、犯人に手錠をかけるのに大変苦労しました。E さんはその後、救急医の治療を受けましたが、6 週間の間は、松葉杖を使って歩くしかありませんでした。

彼は被害者としていかなる国の支援を受けていませんでしたが、幸運なことに友人の一人からアドバイスを受け、ヴァイサー・リング (Weißer Ring) という、ドイツ全土で犯罪の被害者をサポートする非営利団体に相談しました。

彼がそこに電話をかけたとき、誰も電話には出ませんでした。留守番電話がありました。そこで彼は自分の電話番号をメッセージとして残しました。すると、2 時間後にヴァイサー・リングのハーゼさん (Frau Haase) が彼に電話をかけてきてくれ、団体が彼をサポートすると伝えましたし、実際に助けてくれました。また、ハーゼさんが犯罪者と被害者のサークルを作ることを彼に伝えたとき、彼は参加したいと即答しました。

最初に 5 回の準備会議には暴力被害者が 6 人のみ刑務所に集まりました。初めての会議において、刑務所長も被害者である出席者に歓迎の挨拶し、彼はすでに確かに 25,000 人の加害者と接触してきましたが、その日まで被害者とは接触したことがなかったと述べました。それは加害者にとっても同様でした。

犯罪に関与した一人の男性は、10 年間服役していましたが、その会議は彼が犯した犯罪の被害者と初めて話したと語りました。そこで被害者に対する感情がどのように暴力行為と関連しているかを経験したと語りました。T さん (Herr T) は、被害者とのこのような出合いがもっと頻繁にあるべきだと考えています……。

さて、今回取り上げられた犯罪加害者と犯罪被害者が一緒に語り合い、和解をするという取り組みは、とても珍しい試みだと感じましたが、同時に難しい挑戦でもあると思いました。しかしながら、今回事例として取り上げられているビーレフェルトの刑務所での取り組みにおいては一定の成果が上がっているようですので、これからも継続されて行くものだろうと思います。

私が調べたところでは、日本においても犯罪加害者と犯罪被害者が一緒に語り合う試みは

存在するようです。以下 8 行ですが、公益財団法人東京都人権啓発センターのホームページから一部抜粋して引用したいと思います。

・・・これは「修復的司法」と呼ばれるアプローチで、被害者と加害者が対面し、事件について話し合う取り組みです。現行の司法制度だけでは解決できないさまざまな葛藤を、当事者同士が気持ちを伝え合うことで互いの精神的な回復や立ち直りを図り、償いの方法などを模索します。具体的には被害者と加害者が第三者の仲介で直接顔を合わせ、事件にまつわる体験や心境を伝え合い、疑問や不安を解消して、罪の償い方を話し合います。欧米では 20 年以上前から実践されており、公的に制度化されているケースも多くあります。修復的司法を日本で実践している団体も存在し、被害者と加害者の対話を通じて、再犯率の低下などの成果が報告されています・・・。

私は日本においてもこのような試みが存在すること、また欧米においては既に 20 年以上前から行われていることを全く知りませんでした。これらの試みを通じて、再犯率の低下が実現されているようですので、今後も広がって行くことを期待したいと思います。

ところで、今回の課題および放送の中で、犯罪被害者がこの「犯罪者・被害者サークル」において発した「私も終身刑を受けているようなものです」という言葉は印象的でした。重大な罪を犯した加害者が終身刑により刑務所に収容されることは容易に理解できますが、実は犯罪被害者の中にも一生苦しむ人はおり、上記の発言になったのだらうと思いますが、この発言には説得力があると感じました。

また、今回の課題および放送に取り組む中で、以前学習した Nr. 502(2022 年 12 月)を思い出しました。14 ヶ月前も受刑者が関係している話題が取り上げられていました。その時登場したヘルムートさんという長期受刑者はまだ 70 歳を少し過ぎた位の年齢でしたが、当時既に介護を受けており、その後どうなっているか気になりました。

K. K.